

日本古典文学全集

源氏物語

部 秋 生
山 源 虔
井 衛

小学館・刊

阿部秋生

阿部秋生全集 13

1972年11月25日 初 版発行 ISBN4-08-657013-3
1991年7月30日 第 十二版発行

阿 部 秋 生

校注・訳者 秋 山 虔

今 井 源 衛

発 行 者 相 賀 徹 夫

印 刷 所 凸版印刷株式会社

発 行 所 株式会社 小 学 館

〒101-01 東京都千代田区一ツ橋2-3-1

振替口座 東京81-200番

編集 3230-5141

電話(03)業務 3230-5333

販売 3230-5739

© A. Abe K. Akiyama 1972 (著者検印は省略
G. Imai いたしました)

■造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたらおとりかえいたします。

■本書の一部あるいは全部を、無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害となります。あらかじめ小社あて許諾を求めてください。 Printed in Japan

編集委員

秋山

市古貞

五味智英次

小山弘志

神保五彌

鈴木一雄

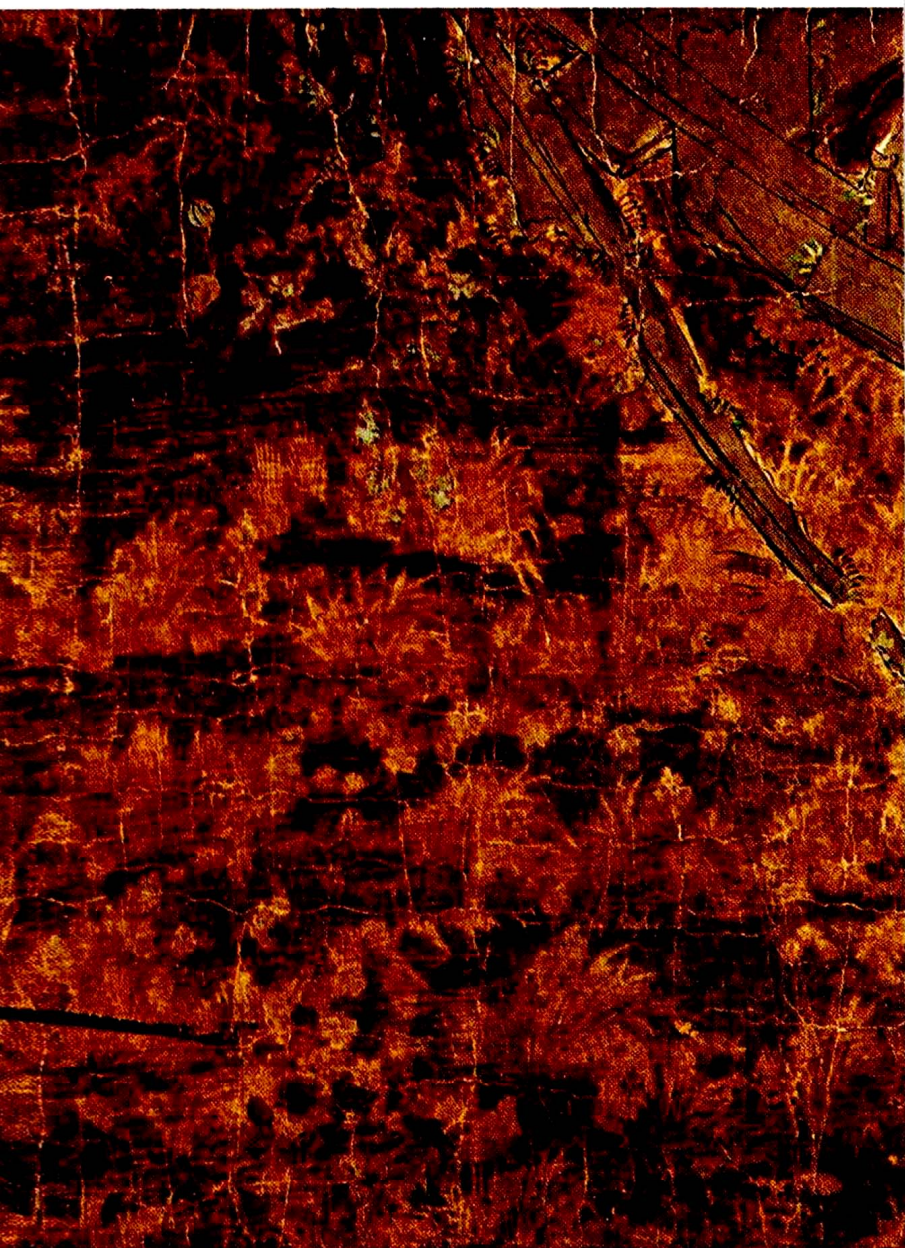
暉木康隆

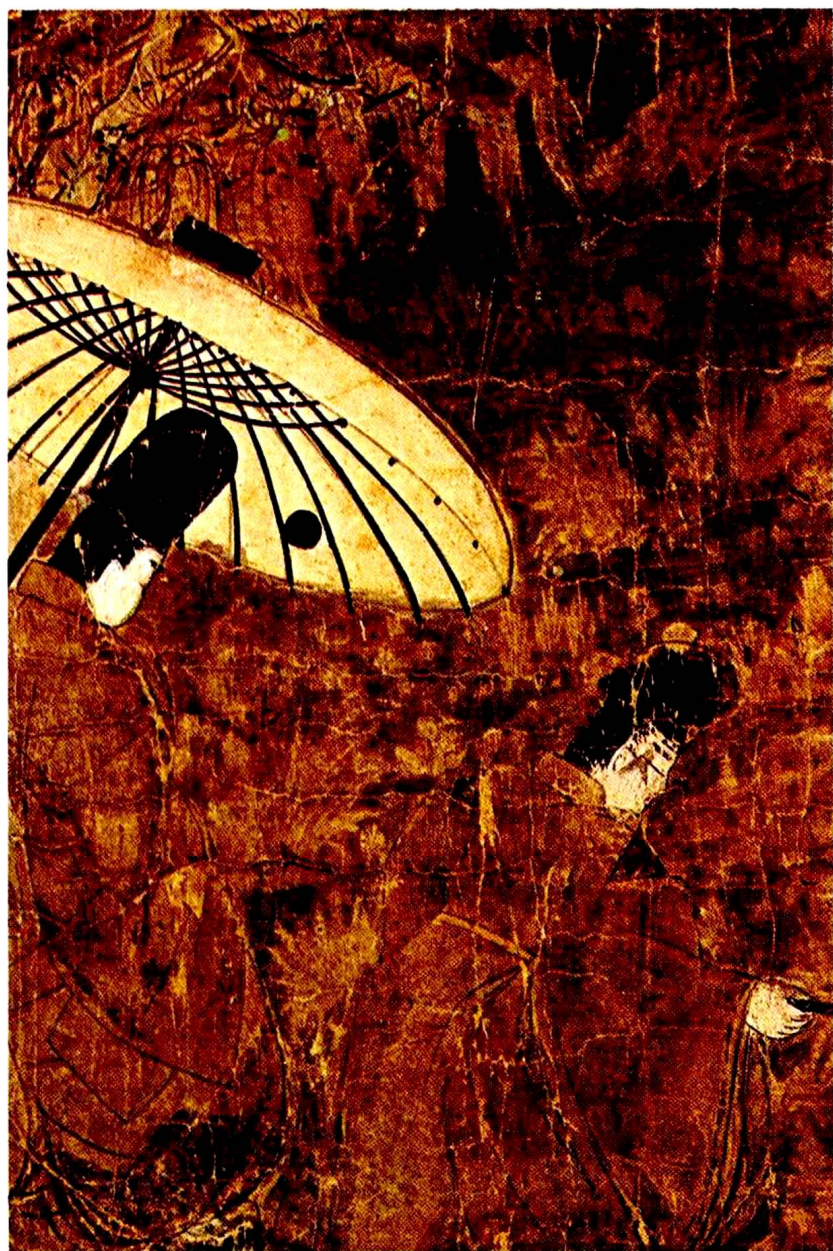
中田祝夫

題字

手島右卿







源氏物語絵巻・蓬生

東京・徳川黎明会蔵

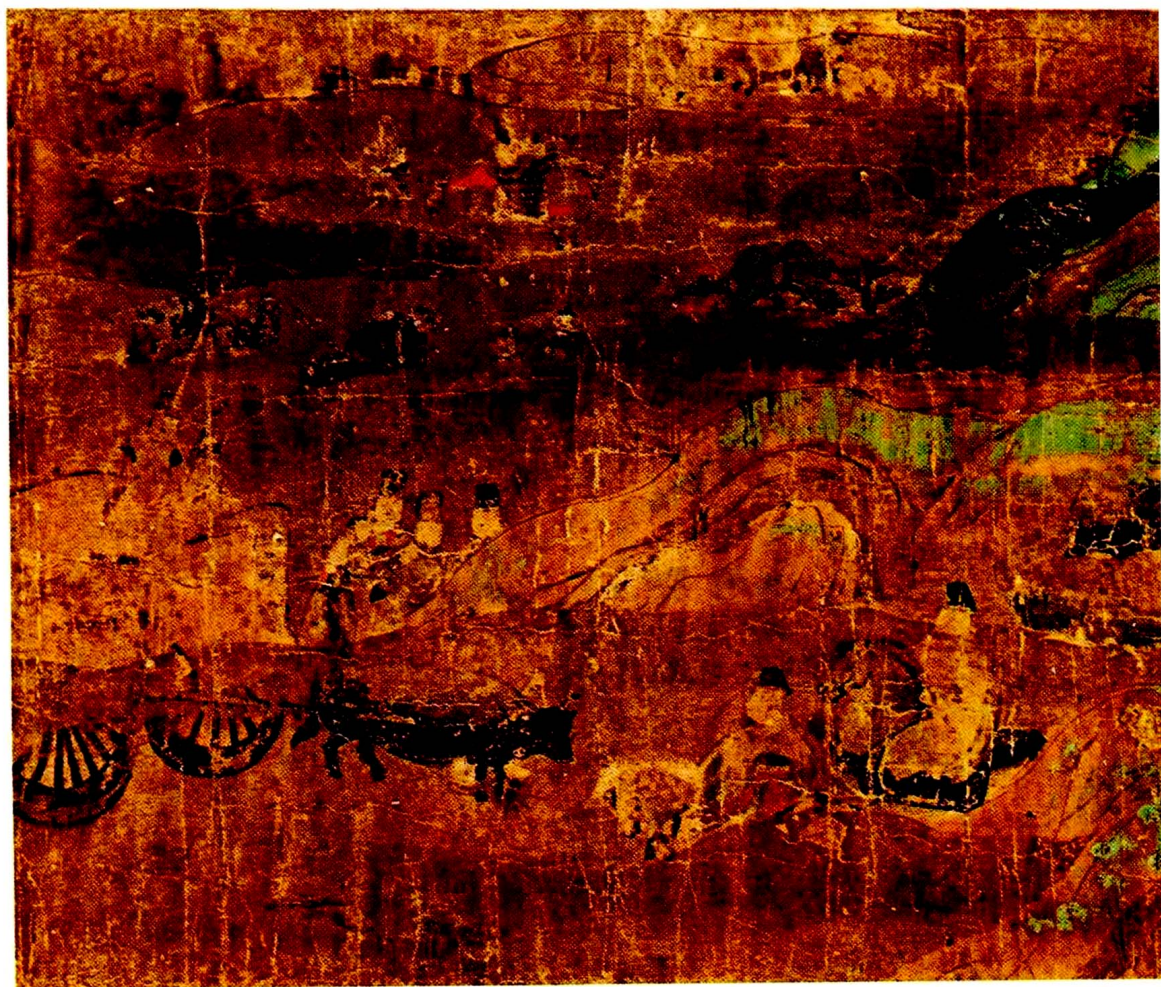
源氏物語・^{みづはし}漣標図屏風 宗達筆
東京・静嘉堂蔵／部分



十五世紀ころから次第に定型化してゆく源氏絵の伝統に、新しい個性の息吹きを与え、大胆な造型性のなかに王朝の美感を蘇らせたのは、十七世紀初頭を飾る宗達の芸術であつた。「関屋・漣標」の屏風一双はその偉大な記念碑といえる。大らかな色面の「関屋」図に対し、この「漣標」図は、住吉社頭における源氏主従と右上の海上に浮かぶ明石の君の船とを鳥瞰的にとらえ、白い砂浜と松林、左方の鳥居、橋など、曲線と直線の交錯のなかに、動きのある人物が細かいリズムを刻んでいる。しかもすべての重心が中央に据えられた源氏の車に集中してゆく構成の妙は、物語絵としての本性にもかなったものといえる。一五・二・二×三五・五・六 cm (秋山 光和)



さきの「蓬生」に続く「関屋」の図は、『源氏物語絵巻』の現存部分では、ただ一つの風景表現として知られる。同じ二十九歳の晩秋、源氏は石山詣でのため、紅葉した逢坂山を越える。そのむかし十七歳の源氏が想いをかけた空蟬は、夫である常陸介に従って東国から京に戻るため、たまたまこの日、琵琶湖ぞいに峠路にかかってきた。画面の左上に拡がる湖の岸をめぐって、旅姿の一行が霞ごしに続き、空蟬の牛車は大きく前景にあらわれている。これに対し右半部では、深い谷と峰と



の重なりの間に、明神の祠
や鳥居、関の清水と思われ
る懸樋（洗堰）などを描き
入れ、源氏の車や供の人々
は、山の間を見え隠れして
進んでくる。人物と山の太
きさがやや釣合いを失する
が、風景の描写はこまやか
に美しい。良質の緑青に群
青を重ね、銀を配し、細く
柔らかな線描で描き起こし
た山々には色づいた木々が
趣を添え、やはり銀泥に群
青をまぜて厚塗りした霞が、
中景と遠景とをへだて、小
画面に奥行きを与えている。

二一・五×四七・二cm

（秋山 光和）

源氏物語・絵合えあひ 冊子表紙絵

奈良・天理図書館蔵



源氏物語は、各時代を通じてさまざまに絵画化され、「源氏絵」として親しまれた。しかし十五世紀以降は各帖から選ばれる場面や図様が次第に固定化してゆく。この濃彩の表紙絵は、そうした伝統のまだ早い例であり、特に古い絵巻で失われた「絵合」の図であることは貴重である。「あはせ」と題箋の貼られた前表紙には、光源氏が自ら所蔵する、新旧の絵巻類をとり出し、紫の上と共に選び整える情景を描く。後表紙は帝の御前における晴れの絵合のさま。中央には梅壺方、弘徽



殿方から競い出された絵巻が、紫檀と沈との箱に納められ、美々しく置かれている。奥には藤壺中宮と、さらに御簾の向こうに帝のおられる心である。彩色は厚手だが品のよい調和を保ち、線描も柔らかく自由である。この写本の筆者は中御門宣胤の子、岩藏真性院の僧宣増と記され、十五世紀末—十六世紀初のものと思われる。絵画の様式技法も、土佐光信筆との伝称は別として、この年代に合致する。

(秋山 光和)

各面二五・四×一七・二cm



「蓬生」「関屋」「綜合」の各詞書と「松風」の断簡とは、第二類と呼ばれる、大らかで力強い書風になる。ねばりのある筆でゆったりと書かれた文字は、自由でしかも快い律動感をもつ。さらにこの一紙は、蘇芳色の遠山と霞が料紙を彩り、こまやかな金銀の野毛切箔と映発して、渾然たる造型美をつくり出している。二一・六×二三・一cm

(秋山 光相)

京にすみかへりたまふてまたのどしのあきそひたちはのほりけるせきいるひしもこのどのはいしやまに御願はたしにまうてたまひけり九月のつこもりなれは紅葉のいろ／＼こきませしもかれのくさむら／＼にをかしくみえわたるにせきやよりさどくつれいてたるくるまたひすかたともいろ／＼のあをつき／＼しき

くわろくねぢもえさるゝあはれをい

まゝとて原一とありけりほたあ

產後差三十初起三死數甚多十一葉渡女所引前聖山女高叔父輩元

争けしあもちの人のふうあてり

三ノ下ノイニト下ハナ

古今圖書集成

イハナニシテ

[illegible]

上
下
左
右
中
外
内
前
後
東
西
南
北

あけなみそをいふ

144

修善寺に在りて

六子院

長一ひるほどなれといふ一と將のふう

貞操千のモ思給ケルコトヲトテキキテトセヨ

六三 小人勿用

ウシノキモウチモハニホフニチワルヌモノハニニツナリナリ

鎌倉時代、藤原定家と並んで、源氏物語研究の家として知られ、河内本を作った河内守源光行、親行父子がその基礎を作り、その一族が加筆して作った注釈『水原抄』は、今日では、諸書に引用されている断編しか伝わらない。この古注は、鎌倉末期の書写で、河内本の本文の行間・上欄・紙背（裏書）にある注の内容からみて、その『水原抄』の一部かといわれるものである。これの前半は七海兵吉氏所蔵として知られている。ここに掲げたのは、後半一巻の冒頭の部分である。（源氏物語②）三九ページ十五行め第十二字以降）

（阿部 秋生）

目次

凡例	三
葵	九
賢木	七
花散里	一四三
須磨	一五二
明石	二二
滯標	二六七
蓬生	三二三
関屋	三四七
絵合	三五七
松風	三六五

薄雲……………四一五

朝顔……………四九七

校訂付記……………四八七

付録

各巻の系図……………四九五

官位相当表……………五〇三

地 図……………五〇四

図 録……………五〇八

口絵目次

源氏物語絵巻・蓬生……………1 源氏物語絵巻・関屋 詞書第一紙……………10

源氏物語・濡標図屏風 宗達筆……………5 伝定家筆・花散里巻 冒頭……………11

源氏物語絵巻・関屋……………6 源氏物語古注・葵巻……………12

源氏物語・絵合 冊子表紙絵……………8